

2 大渡野番所跡（おわたのばんしょあと）

(1) 市指定史跡「大村街道」と「大渡野番所跡」の歴史的・地理的概要

大村街道は、古くは古代官道の西海道の一部で、大宰府から現佐賀県にある肥前国府を經由し大村―諫早間を通る主要道路であった。平安中期に編纂された律令制施行細則である三大格式の一つ『延喜式』には塩田駅（現佐賀県嬉野市）から先に「新分駅」（現大村市か）と「船越駅」（現諫早市）の二駅が記載されている。その2駅を結ぶルートとして大村街道が整備されたと考えられている。（木本 2000）

江戸時代に入ると、福岡県小倉―長崎間57里（約224km）の「長崎街道」が整備され、幕府直轄の貿易港・長崎と江戸を結ぶ主要な脇街道となり、長崎奉行の交替や出島オランダ商館長の江戸参府などに利用された。その一部になる諫早市破籠井町から山間部に入り日野見岳の麓を経て、大村市との境界に至るまでの1,460mを、昭和53年諫早市指定史跡として文化財指定した。

大渡野番所の位置は、市指定史跡「大村街道」のほぼ中間地点（約0.8km）に所在する。このあたりの字名が「日野」であることから「日野番所」と記した記録もある。（山口 2000）安政3（1856）年に描かれた絵図『高来郡諫早郷図』（長崎歴史文化博物館蔵）には大村街道沿いに屋敷が描かれ、現在でも街道沿いには石垣が残り、屋敷跡には礎石や石列の痕跡が残る。

江戸時代の佐賀（鍋島）藩諫早領では幕府が推し進めていた鎖国政策のため、領内の要衝となる場所には番所を置き、出入者を厳しく取り締まっていた。元禄年間（1688～1704年）に描かれた絵図『領内部分図』（『諫早家文書』、諫早市立図書館蔵）の諫早領の西部から中央部にあたる本野村―津水村―長田村を描いた絵図には、「破籠井村」と「大



第45図 北部九州の近世主要街道



写真23 領内部分図（元禄年間）紙本着色（画像上部が北）

渡野村」の村境、西の「彼杵郡大村領」との領境の近くに太い赤で示された道がある。その道沿い、「日野辻」を少し下ったあたりに「番所」という文字と共に建物と柵が描かれている。描かれているのはおそらく大渡野番所で、元禄年間にはすでに存在したことがうかがえる貴重な資料である。また、正徳2（1712）年に書かれた『恒例帳』（『諫早家文書』、諫早市立図書館蔵）の「一、所々番所之事」に記された記録には諫早領内に22箇所の番所があったことがわかる。その詳細な記録には、

- 一、日野番式人 番料一人式石七斗宛
    - 一、番所出来修理方迄佐嘉ヨリ調付たり番人居所右同断自分<sub>ニ</sub>作り前之分<sub>ハ</sub>無構
    - 一、畳作事方調
    - 一、鯨油一ヶ月壺外岡御蔵ヨリ渡ル
    - 一、薪一ヶ月<sub>ニ</sub>一人三荷宛点役夫<sub>ニ</sub>而渡
- 右番料油佐嘉ヨリ相渡候者御目付方へ納ル

とあり、その他の番所の記録を確認すると役人が2人以上配置されていたのは大渡野番所含め、9箇所であった。（光富 1981）また、幕末の動乱期には3人体制に増員された。（大島 2008）

大渡野番所は長崎街道である大村街道沿いに設置された番所である。「番所」とは江戸時代、船舶、通行者、荷物などの見張りや税の徴収を行う施設である。この中でも「口留<sup>くちどめ</sup>番所」は諸藩が他領と接する要地に設けた小規模な関所の総称であり、出入り人を調べ、商品の流通を監視し、必要な場合は穀留<sup>こくどめ</sup>など物資の出入りを停止する番所である。大渡野番所は、大村藩と佐賀藩諫早領の隣接する要地にあったことからこの「口留番所」にあたりと推測される。

明治35（1902）年発行（明治33年測量）の測図「二万正式図」（大日本帝國陸地測量部）の「大渡野」には番所と思われる建物の記号が存在する。大正期の地図からはこの姿はなくなるので、明治期後半までは建物としての利用があったと推測できる。

## （2）調査について

今回の調査は、諫早市指定史跡「大村街道」に隣接する大渡野番所跡の石垣が樹木の根により崩壊する恐れがあったことに併せ、大村街道を歴史的な資源として活用するため、現状を記録保存する測量図を作成した。

調査は、扇精光コンサルタンツ株式会社へ測量業務を委託し、トータルステーション、写真測量、3次元レーザー測量を行い、平面図（第47図、第48図）と立面図（第49図）、



第46図 大渡野番所跡位置図（S=1/25,000）

Geo Viewを使用した3次元点群画像を作図し、現状把握を行った。また地表を踏査すると、陶磁器片や瓦片などが確認できたため、これらを採集した。

大渡野番所の規模は、面積約917㎡、石垣の長さは28mである。（第47図）北側と東側には敷地境界を示す急峻な斜面がある。南側に石垣があり、敷地全体が平坦に造成されている。石垣は街道沿いに伸び、西から東に向け階段状の傾斜を見せ、造成面は3段ということが特徴である。

3段の敷地のうち、西側最上段の平坦面が最も広く、南北約22.5m、東西約15mで中央南側に南北8m東西10mほどの建物の基礎痕跡と思われる遺構が地表面で確認できる（平坦面A）。平坦面Aは第47図（等高線図）に現れる通り、東の縁は標高146mの等高線とその南方面にある石垣で区切られている。西の縁は、南側の街道沿いの石柱に接する石垣から標高147mを記す等高線に向かって区切られる。南の縁は街道に面した石垣で区切られて、北の縁は崖に接して途切れる。平面的には南北に長い方形で、傾斜は約15m幅を東に1m下る緩やかな地形である。基礎痕跡と思われる遺構の構造は、東側は石積み、西側は盛土で構成されている。

中段の造成面は、標高145.5mの等高線と中央でクランク状に曲がる石垣とで区切られ、南側の街道沿いの石垣が平坦面Aの東縁から伸び、西側でわずかに北側に湾曲した位置で区切られる。平坦面Aに比べ面積も狭く、中央東側の等高線がほぼ直角に曲がる点と、約10m四方の平坦面とその北側にある平坦面に区分されている点が特徴的である（平坦面B）。

また、平坦面Bは北側から東側最下段の造成面へ下るような等高線も特徴である。東側最下段は標高143.5mと143mの等高線に囲まれている。中段の造成面と1～1.5mの段差があり、三角形の平面形を呈する（平坦面C）。平坦面Cの東の縁は標高142.5mの等高線上にある石垣で区切られる。

大渡野番所跡は、令和元年7月5日付け、31諫文第112号にて、長崎県教育委員会へ遺跡発見の報告を行い、同月23日付け、31教文第315号にて長崎県教育委員会より新規遺跡として登録の通知を受けた。

### （3）遺構について

今回の調査は測量調査であり、地下構造については確認していない。地表面で確認できた遺構は南側大村街道沿いに面した石垣の2種類であり、1種類目の長い石垣（石垣01）は約23m、段数は最大5段の野面積みで構成されている。一部、樹木の根により崩壊した部分がある。2種類目の石垣（石垣02・03）は、最下段の南側にある角をもつ石垣で、段数は1段であるが60cm程度の大きさの平な面を持つ自然石を立てて石垣としている。また、街道を挟んで南側にも類似する石垣があり番所の入り口としての目印となるような印象を受ける。

また、前述したとおり、敷地内には建物を区切るような石列が4箇所ある。平坦面Aは中央に集石があり、内側の隅角があるため元は建物基礎の一部であった可能性がある。その東側中央に約90cmの溝状の石列でできた隙間があり、標高が平坦面Aから10cm下がり平坦面Bへつながる。平坦面Bには前述したクランク状の石列と東側中央に平坦面Cとの段差の近くに集石がある。平坦面Cには石列や集石は確認できなかった。

### （4）採集遺物について（第50図～第52図、写真24～28）

採集遺物は、総数パソコンテナ3箱分あり、主に17世紀後半から近代までの陶磁器が占める。

平成31年3月5日の採集では遺跡内で任意のグリッドを設定し、遺物を採集した。グリッドは最上段造成面

を1区、中段造成面を2区、最下段造成面を3区とし、各区を中心から十字に4等分し、各区に南西・南東・北西・北東の順で枝番を振り分けた。最も採集品の密度の高いグリッドは1区の1-2グリッドであり、碗や皿などの食器類が26点採集できた。最下段3区は採集品の密度は低く、3-1グリッドのみの採集で11点にとどまる。番所跡内の特徴としては最、上段西側の1-1・1-3グリッドにおいては灯明皿、火鉢と思われる瓦質土器や土瓶など火に使用する道具が多く、中段西側2-1・2-3グリッドでのみ仏飯器が採集された。また、中段2-2グリッドは壺や鉢、甕など大型器の採集数が他グリッドより多かった。街道側にも磁器片が散乱しており、番所の敷地内にあったものが流出したものと思われる。

採集物は番所の最終的な利用時期を判断するものも看取できるため、可能な限り実測図化し、報告を行う。

### 陶磁器

陶器は瓶、鉢、甕・壺類が採集できた。ソロバン玉型の土瓶（4）や銅緑釉土瓶が採集された。いずれも大橋編年（家田 2000）のV期（18世紀後半～19世紀）で銅緑釉は19世紀前半から製造されるようになる。頸部から胴部にかけて化粧土を施し鉄絵が描かれている長頸瓶（14）が採集された。肩はやや張り、内面は縦に削り撫で消してある。胎土は赤みがかかった黒色で作りは非常に上品な作りであるが、肥前陶器なのか時代も不明である。甕・壺類では弓野焼の飯銅甕片（20）が多数採集できた。弓野焼は天文2（1533）年、肥前国藤津郡弓野（現佐賀県武雄市西川登町）で開窯した古い窯である。（越中・下川 1987）天保10（1840）年には廃窯したが、筑後国三池郡二川（現福岡県みやま市）に陶工が招かれ二川窯が開かれた（昭和初期に廃窯）。また、他の甕類は黒褐色釉の、口縁部が40cmを超える大型のもの（17、22）がほとんどで、口唇部はすべて内側に突出し、落ち込むものであることから18世紀から19世紀のもので占められている。15は若干ではあるが口唇部が張り出し、沈線と波状文が施されている。大橋編年（東中川 2000）によると、18世紀前半の有田志田西山窯に同系統のものがあることから、採集品内の甕では最も時代が遡るものである。

8は肥前系（瀬古窯カ）の小広東碗片である。瀬古窯は現長崎市東町瀬古に所在する。「日新記」には文化2（1805）年、現川窯（1691年開窯～1749年廃窯）の再興の名目で八戸重の願出があり、許可されたことが記録されているが、19世紀中頃には廃窯している。（織田 1998）また小広東碗は、佐賀有田の窯において1780年頃から現れ、1840年頃には衰退する。波佐見の窯においても1830年ころまでは製造していたとされる。（中野 2000）その他の肥前系の磁器はIV期（1690～1780年代）とV期（1820～1860）のものも多く、くらわんか碗（7、9、13、26、30、31、37）、その中でもコンニャク印判の付かれたもの（19、27、28、29）、その後出現する蓋付碗の蓋（11、12、16、32、33）、ペンシルドロー風の端反碗（36）、碗皿類以外では重ね物の蓋（2）などが採集されている。土地の中央周辺には前述したとおり蛸唐草文の仏飯器（23）が採集されている。特に新しいものとしては、人工コバルトの染料を使用した型紙摺りの碗がある。（6）人工コバルトは天然の呉須より発色が強く、幕末から使用され始めた。型紙摺りの技術は江戸後期には少量ながら使われていたが短期間で衰退し、明治期に再興したが大正期に銅板摺りが利用されるようになってから衰退した。

### その他不明土器類

今回の採集品の中で、瓦質土器が18点採集された。湾曲が浅く、周囲を面取りしてあり、内面に刷毛調整を施している。ほぼ板状の破片もある。胎土には滑石の粒子を多く含む。器形は弧を描き、角をもつ口縁部が採集されている（5、18）ことから火鉢や風炉の一種かと思われるが、全体像は不明である。

### （5）総括

今回の測量調査及び遺物調査において絵図や文献と摺合せの上、総括を行う。

まず、今回の調査では、絵図や文献だけでは明らかでなかった大渡野番所跡の規模と具体的な構造が地表面で確認できる範囲ではあるが、明らかになった。以前から確認できていた石垣の全貌が明らかになったことも成果と言えるが、特筆すべきは、土地が3段構えの平坦面構造であったこととそれを区切る石列が現存していたことである。採集遺物は、平坦面Aと平坦面Bとの境と街道沿いを中心に17世紀中頃から最も時代を下るもので明治期までのものが採集できたことで、人の生活する建物としての機能が明治期頃まで継続していたことがうかがえる。

今回の測量と採集遺物の検討から、大村街道が大村鈴田―諫早永昌間を17世紀後半以前から幕末、もしくは明治期まで「街道」として重要な機能を有していたということが判明した。これは、市指定史跡「大村街道」の歴史的・文化財的価値を底上げするものであり、大渡野番所跡を史跡として具体的に価値付ける内容である。

今後の課題としては、文献上の記録や絵図の記録では解明できない部分も多く、大渡野番所の具体的な設置時期がどこまで遡るのかを、発掘調査を行うことにより明らかにしていくところであろう。

終わりに、調査において下川達彌氏、橋本幸男氏はじめ、ご助言いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

#### 参考文献

- 1981年 光富博「諫早領内の番所（恒例帳・正徳2年）」『諫早史談』第13号 p.78-80 諫早史談会
- 1987年 越中哲也・下川達彌監修「弓野焼」『肥前崎陽の古陶磁』 p.73-p.82 つかさコレクション展示館
- 1998年 織田武人「瀬古焼―V」『諫早史談』第30号 p.45-51 諫早史談会
- 2000年 家田淳一「陶器の編年 2. 播鉢・鉢・片口・水指・茶入・土瓶・水注・灯火具」『九州陶磁の編年』 p.34-57 九州近世陶磁学会
- 2000年 木本雅康「二 『延喜式』 駅路について」『長崎街道―長崎県 歴史の道（長崎街道）調査事業報告書一』 p.6-14 長崎県教育委員会
- 2000年 中野雄二「波佐見」『九州陶磁の編年』 p.254-289 九州近世陶磁学会
- 2000年 東中川忠美「陶器の編年 4. 壺・甕」『九州陶磁の編年』 p.64-75 九州近世陶磁学会
- 2000年 山口八郎「三 沿道の文化財」『長崎街道―長崎県 歴史の道（長崎街道）調査事業報告書一』 p.84-90 長崎県教育委員会
- 2007年 大島大輔「長崎街道探訪記」『諫早史談』第40号 p.22-30 諫早史談会

#### 図版出典

- 第45図 九州文化図録撰書1 創刊号「長崎街道 大里・小倉と筑前六宿」（図書出版のぶ工房）（2000年刊行）より抜粋
- 第46図 国土地理院地図「諫早」平成13年発行より作成

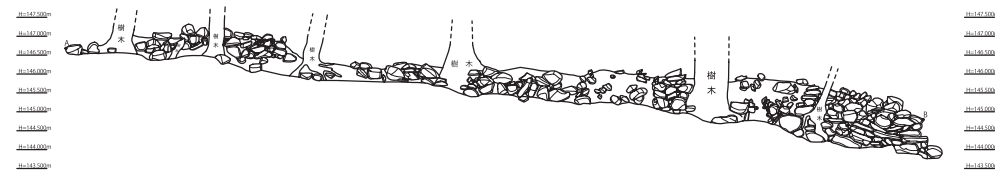


第47図 大渡野番所跡遺構配置図・等高線図 (S=1/300)

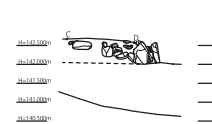


第48図 大渡野番所跡遺構配置図 (S=1/400)

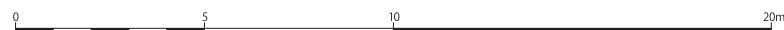
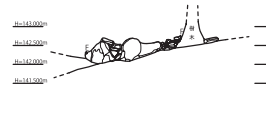
石垣01



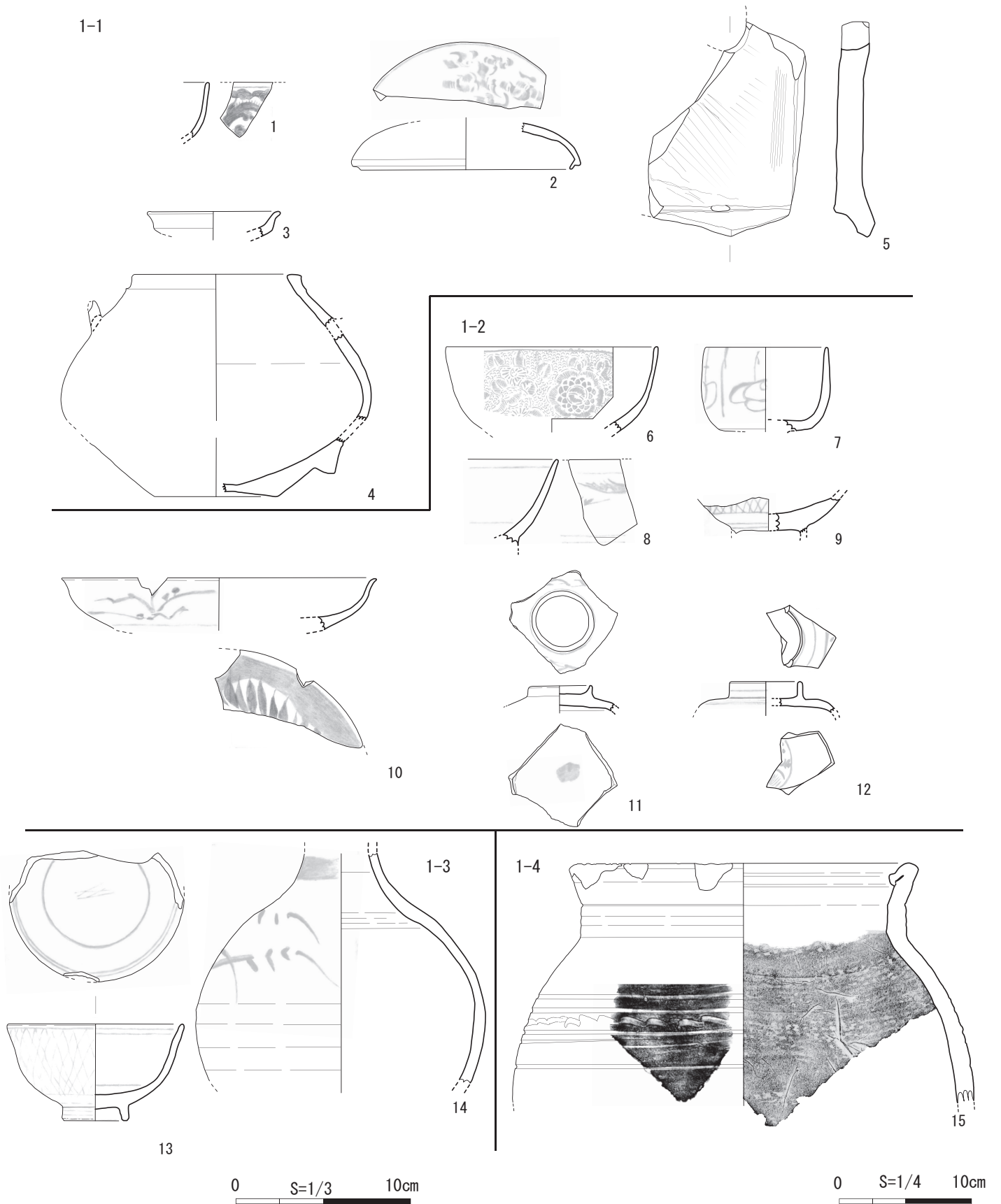
石垣02



石垣03

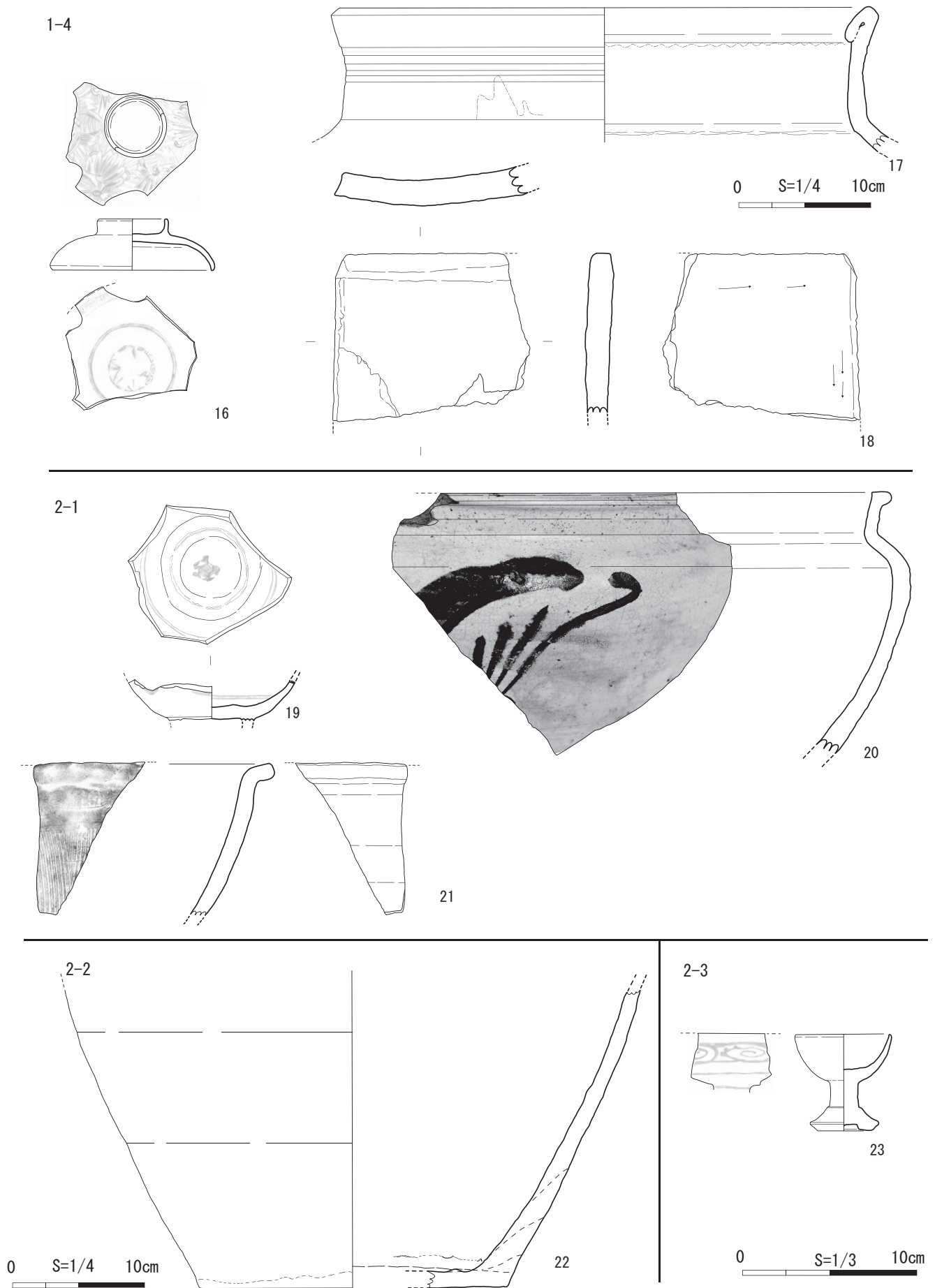


第49図 大渡野番所跡石垣立面図 (S=1/200)

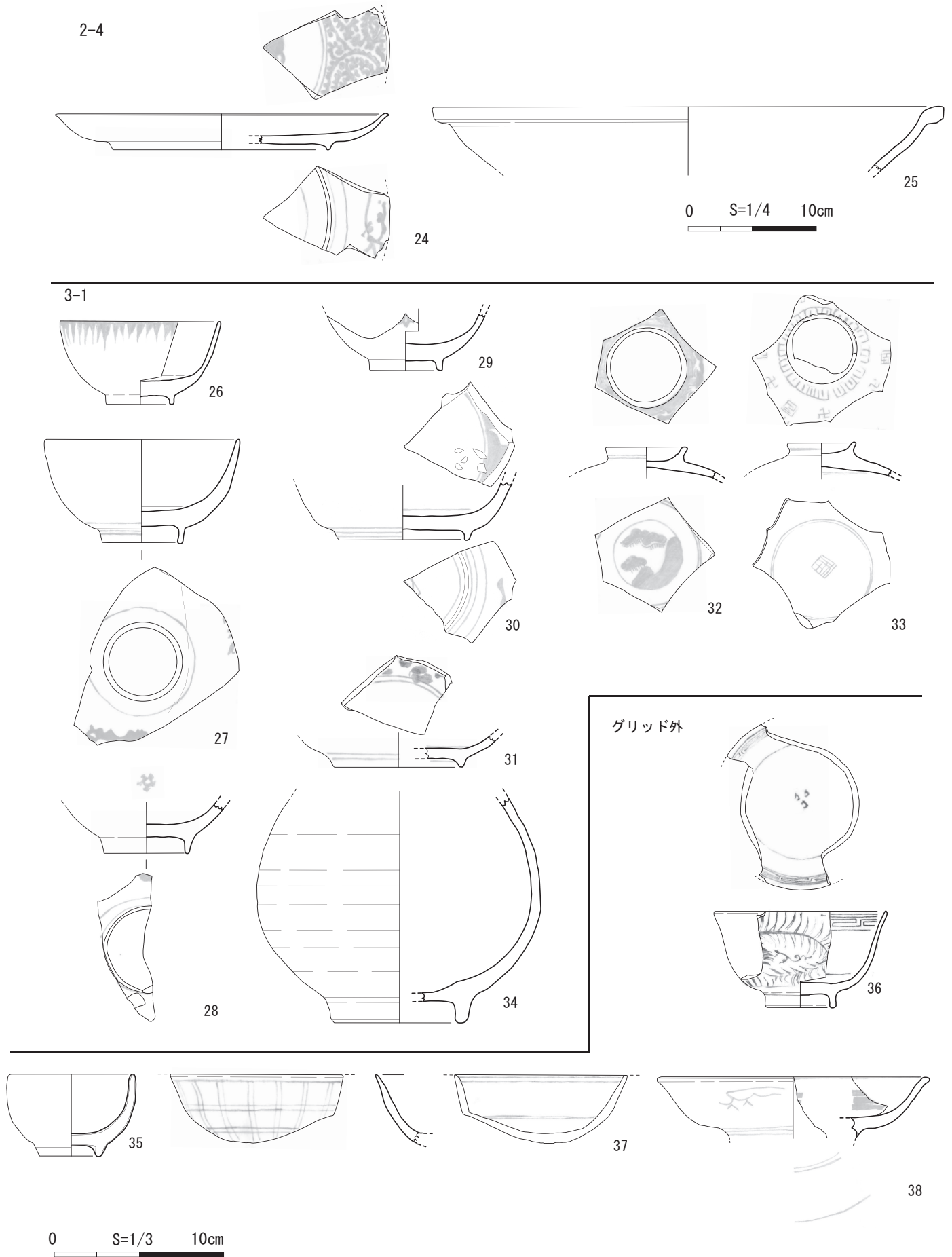


第50図 大渡野番所跡採集遺物実測図（1～14はS=1/3、15はS=1/4）

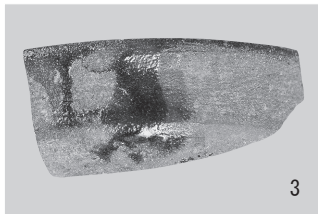
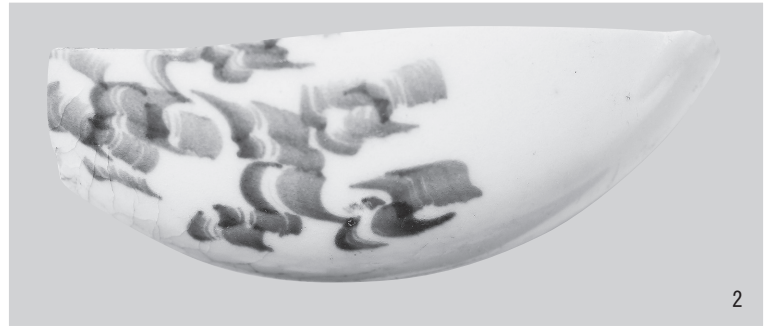
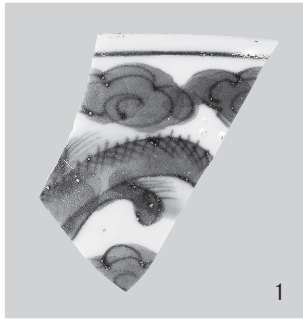




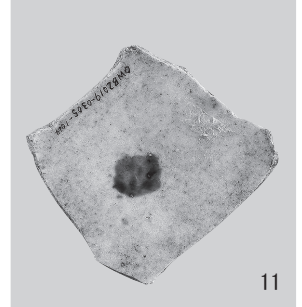
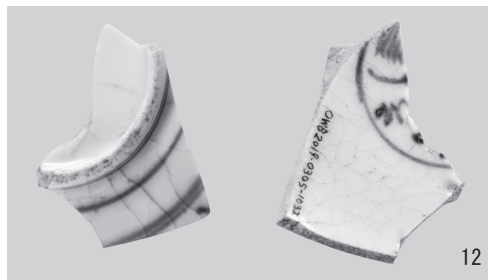
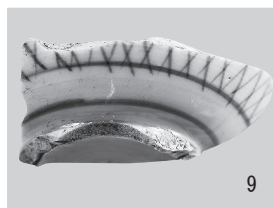
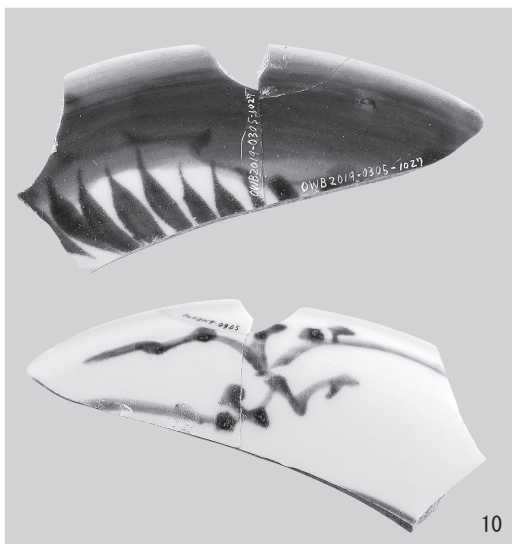
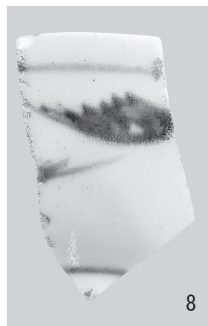
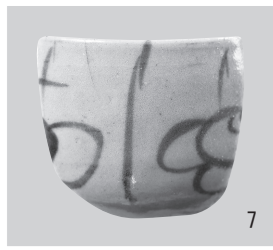
第51図 大渡野番所跡採集遺物実測図（18, 19~21, 23はS=1/3、17, 22はS=1/4）



第52図 大渡野番所跡採集遺物実測図（24, 26～38はS=1/3、25はS=1/4）

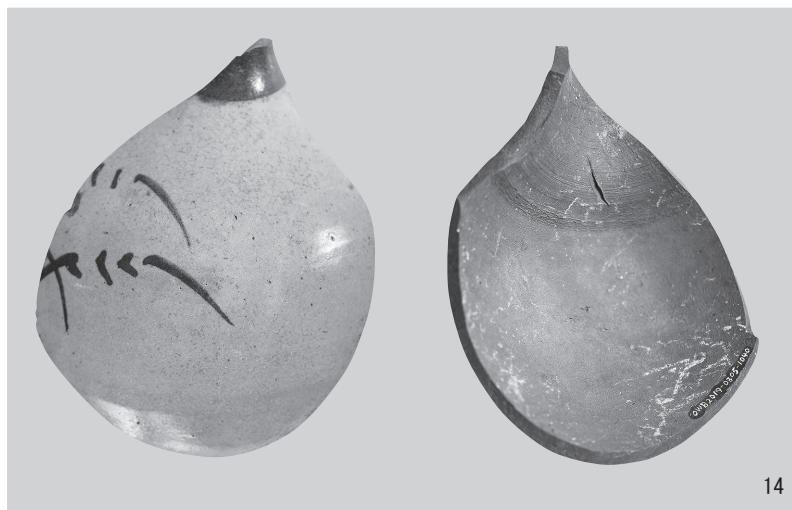


1-1区  
(1~5)

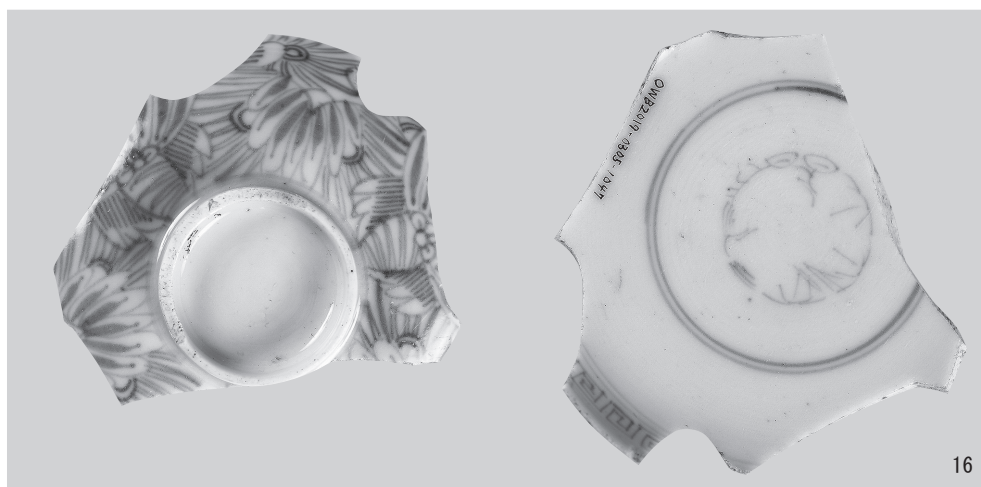
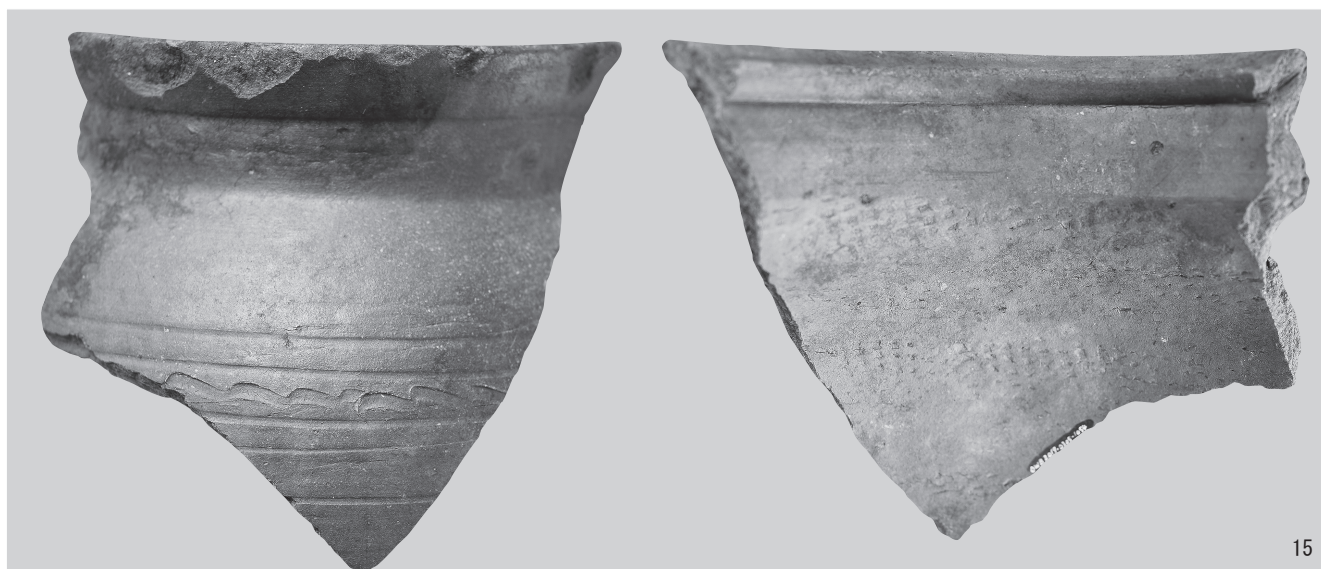


1-2区  
(6~12)

写真24 大渡野番所跡採集品の写真1



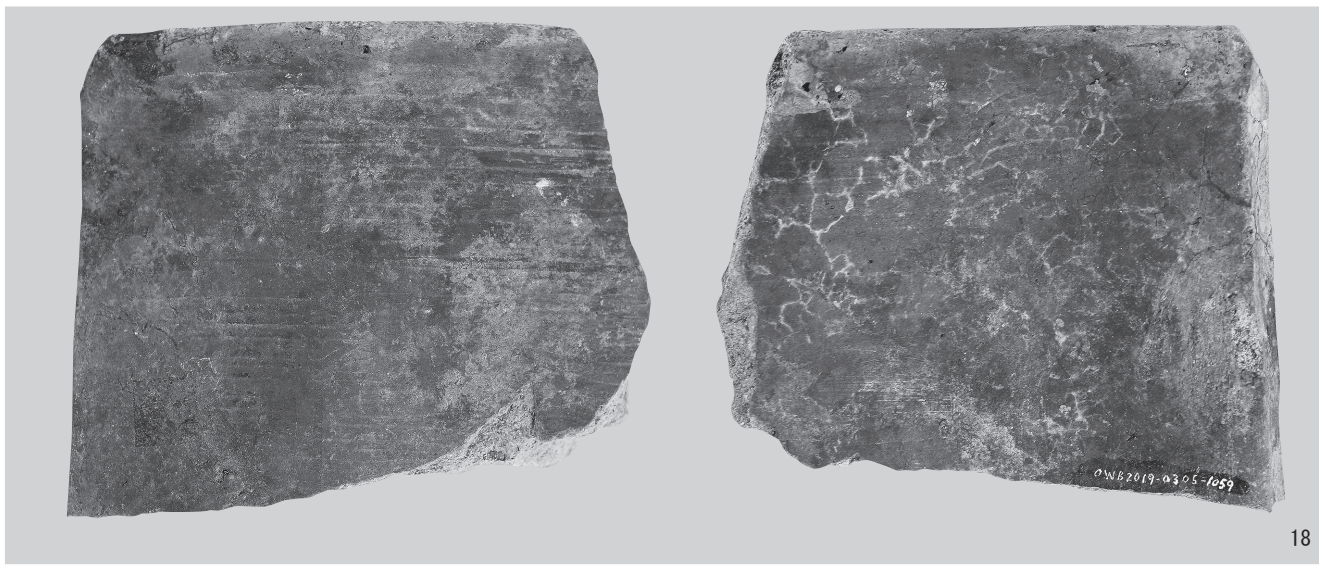
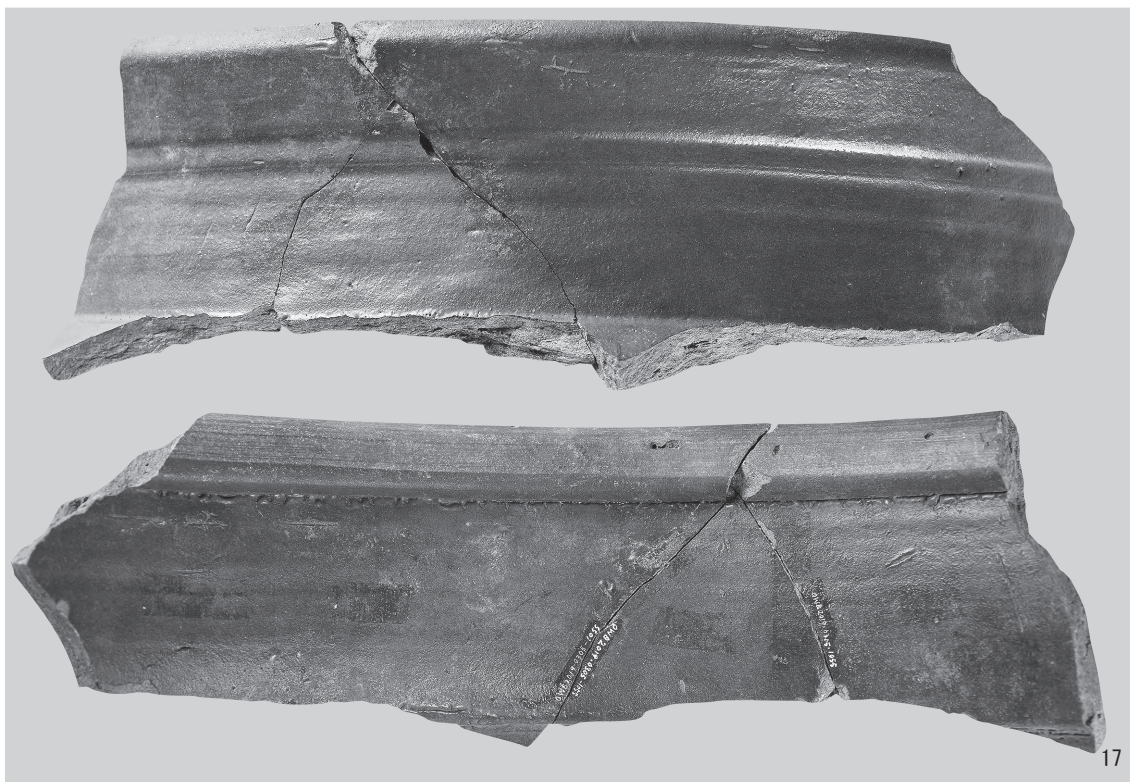
1-3区  
(13~14)



1-4区 (15~16)

写真25 大渡野番所跡採集品の写真2

1-4区 (17~18)

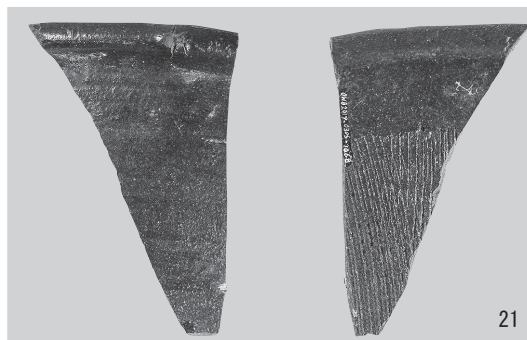
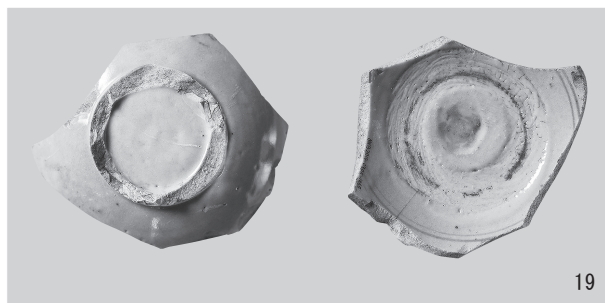


2-1区 (20)

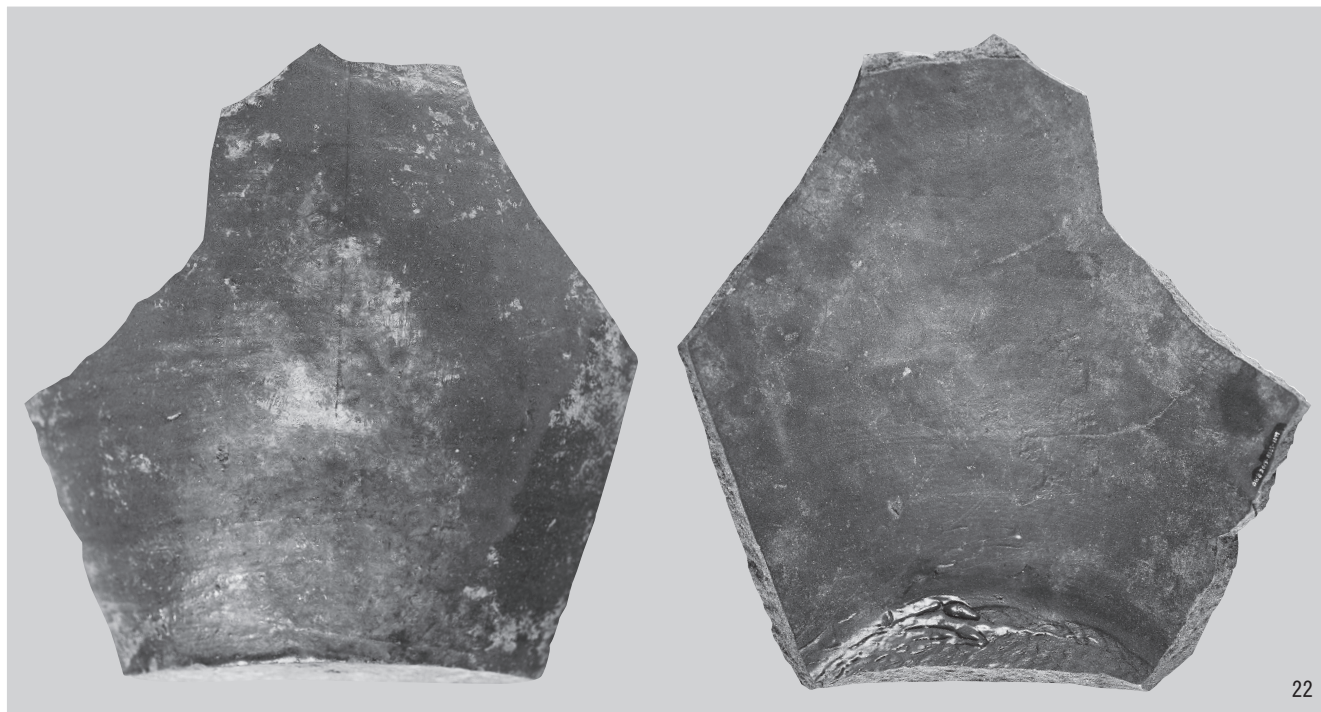


写真26 大渡野番所跡採集品の写真3

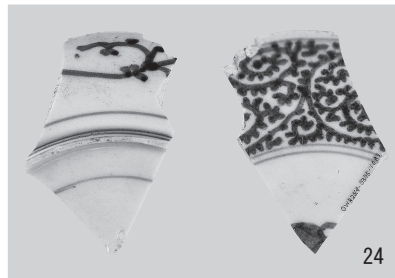
2-1区 (19・21)



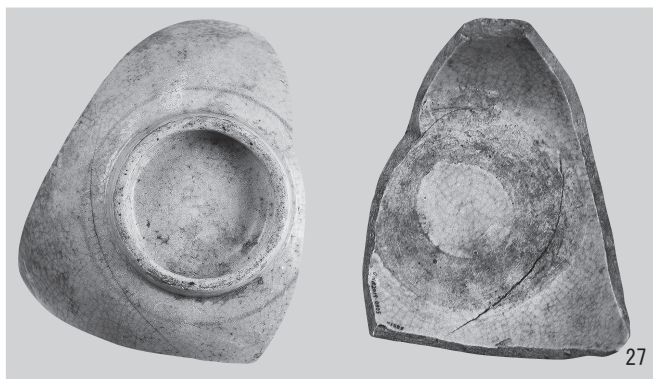
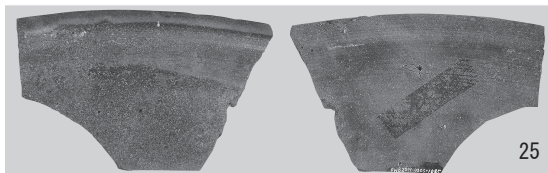
2-2区



2-3区



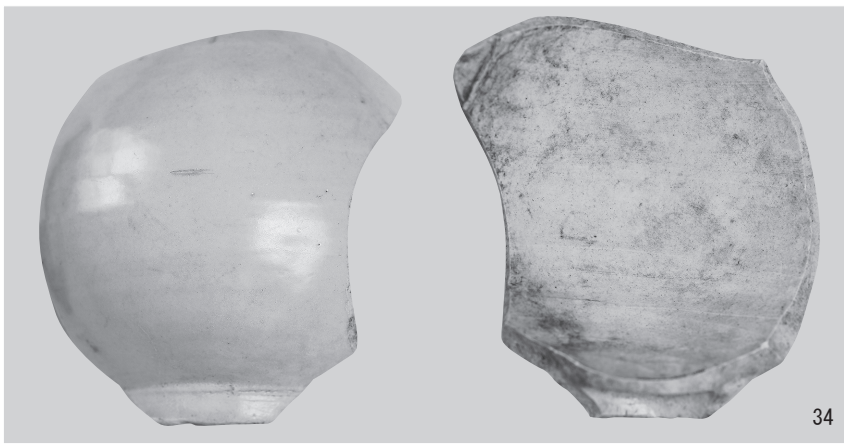
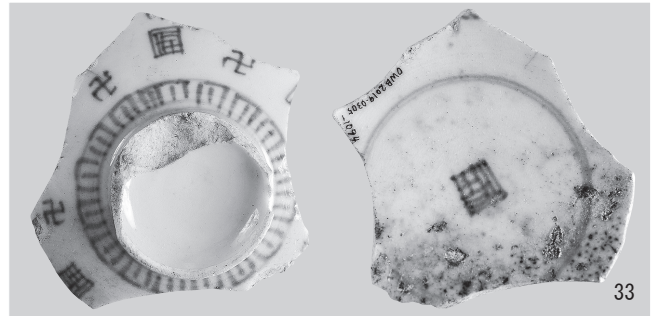
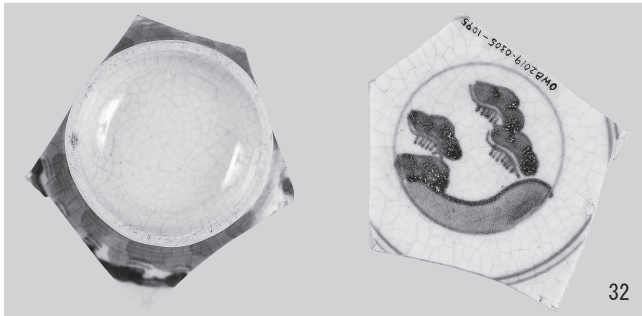
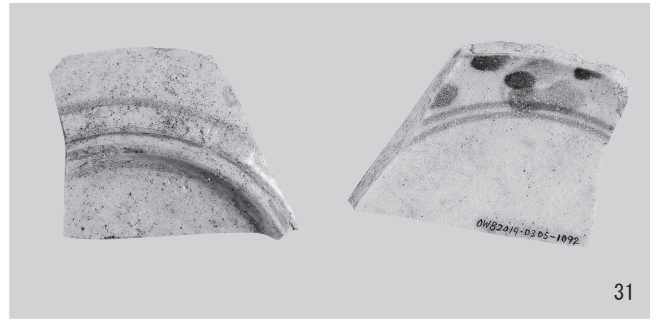
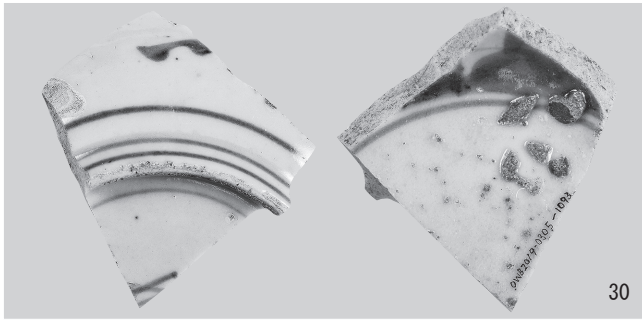
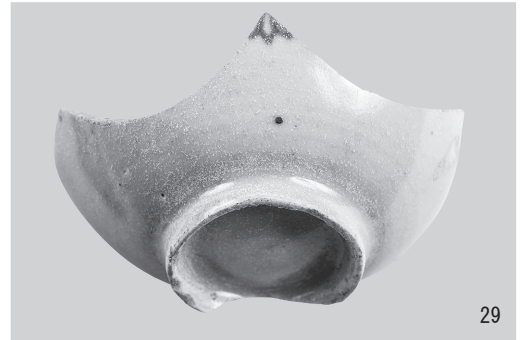
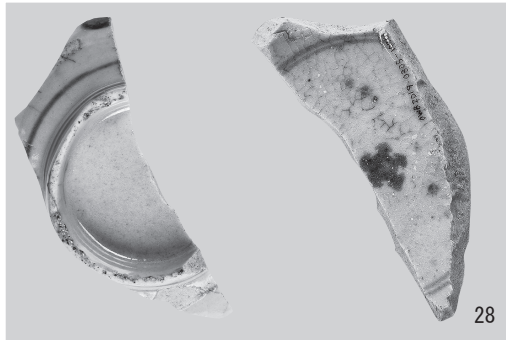
2-4区 (24~25)



3-1区  
(26・27)

写真27 大渡野番所跡採集品の写真4

3-1区  
(28~34)



グリッド外 (35~36)

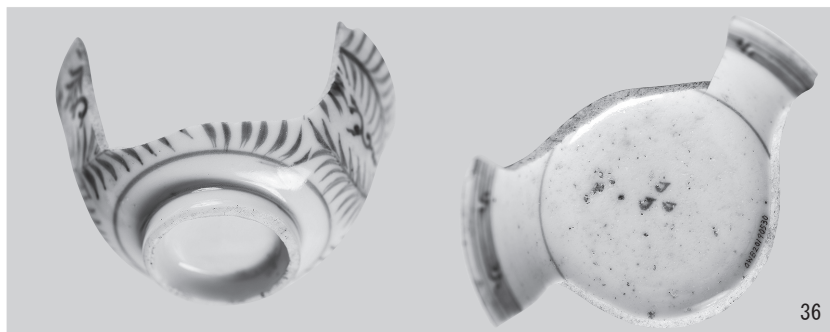
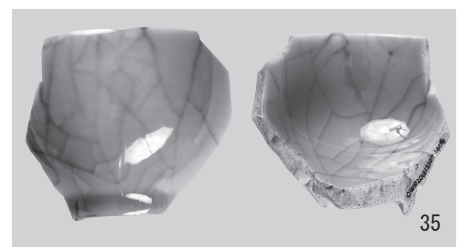
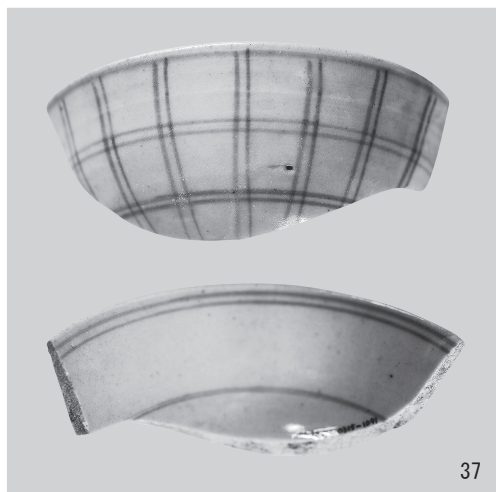
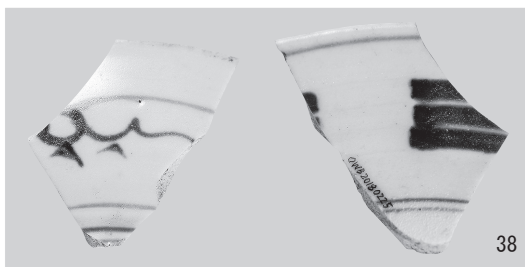


写真28 大渡野番所跡採集品の写真5

グリッド外 (37~38)



37



38

写真29 大渡野番所跡採集品の写真6

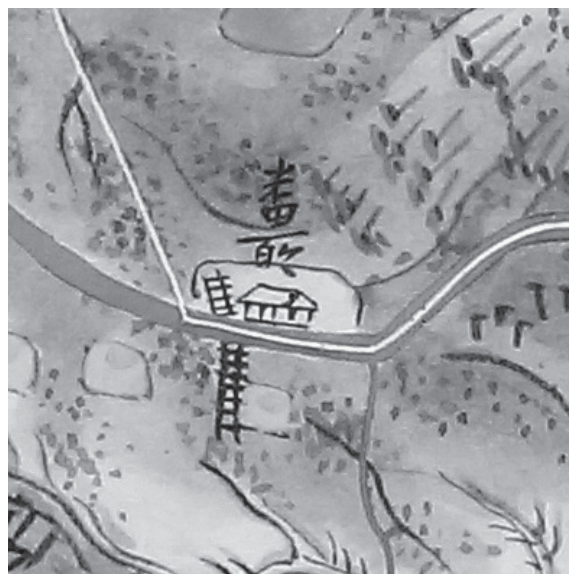


写真30 大渡野番所跡を描いた元禄期の絵図 ※右上は番所跡の拡大写真